

〔巻頭言〕

大学教員の仕事

看護研究センター教授 会田 敬志

「先生っていつも何やってるんですか？」

学生と雑談しているとときどきそう聞かれることがある。授業をやる以外に何をやっているのか。思い返してみれば自分が学生のときにもそう感じていたような気がする。研究室にいつ行ってもいない、いないと思ってドアをノックしたらいてびっくりした、そんなことが繰り返されると「何やってんだろう」という疑問になるのであろう。

これは世間一般の人にとっても同様で、授業以外は時間的余裕があるように思われることがたびたびある。もっとも教員と言えば一応仕事についてはば理解してもらえる。筆者の以前の職場は研究センターであったが、「仕事は何か」と聞かれて研究員と答えると必ず「何をやっているんですか？」と聞かれる。一応説明するが、相手が納得してくれることは少なく、口ではわかったように話していても明らかに顔は腑に落ちないという表情をしていることが少なからずあった。

大学の専任教員の仕事は何か。個人的には教育、研究、大学運営、社会貢献の4つであると思っているが、この点については異論がなかろう。もっとも研究の方を重視して、研究、教育という順番だと言う教員もいるであろうが、一応「教」という漢字が当てられているので教育の方が先と考えたい。また、大学運営ではなく学内行政だと言う教員もいるであろうし、社会貢献の名のもとにマスコミに出たり、講演で金を集めまくったりという有名人もいるであろうが、大多数のまっとうな大学教員はこの4つの仕事をどれもおろそかにせず、時間をやり繰りして懸命にバランスをとっているのではないかと思う。

最近『アメリカの大学』という本の中に次のような記述¹⁾があるのを見つけた。

ひるがえって考えて見るならば、大学教師ははじめ文字通り、教える人として、この世に誕生した。しかし、研究という役割がつけ加わることによって、大学教師は教育と研究の二股をかける二重人格として変身した。そしてさらに、学内行政という役割が加わることによって、今度は三重人格となり、さらにはまた、学外活動という役割が加わることによって、四重人格として変身することになった。

機能分化・分業化という時代の流れとは逆行して、機能増殖、機能拡大という重荷を背負わされた結果、破綻を来し、その結果、「教育型」「研究型」「運営型」「学外活動型」といった諸類型のスペシャリストが出現したわけであるが、この『アメリカの大学』という本の中に書かれているのは1820年から1910年頃までのアメリカのカレッジや大学のことであって、決して現代の話ではないことに驚かされる。大学教員の仕事なんぞはここ百年来変わり映えがしないということか。

では大学教員にはどのような能力や資質が期待されるのか。あまり明確な形で示されてきてはいないと思う。そもそも大学教員の評価自体も過去の業績を見ているのか、将来性を見ているのか、その業績は社会への貢献か、大学への貢献か、といった点などもはっきりしていない。大学教員が「教育型」「研究型」「運営型」「学外活動型」に分けられるというのであれば、例えば研究が劣っていても、教育に時間を多く割き、授業の質が高ければ、それは「教育型」のスペシャリストとして認知されるということなのであろう。

だが、教育の評価は難しいと思う。米国では教育面は授業評価、学生指導、受講生の数、教科書等の作成などで評価されるそうであるが、何をどう見る

かによって評価は大きく異なるような気がする。

むしろ、日本の多くの大学ではまず研究、それも論文数で評価しているのが実情ではないだろうか。研究の評価ということでいつも思い出すのが学生時代に読んだ『人類生態学の方法』という本の中の次のような記述²⁾である。

長い年月を経過し、すでにしてでき上がってしまったと人々が認めている科学の分野においては、その領域に新しく参加してくる若い研究者が、いかなる問題を、どのように扱うべきかについて迷うことはほとんどない。既存の学説を吟味し、集積された文献を検討し、問題を限定し、自己の属する研究室が得意としている手法を習得し、仕事を始めればよい。いってしまえば、現代科学といってもその多くの分野における若い研究者の養成はきわめて徒弟修業風である。

もちろん、それなりの能力は必要であるが、だからといって特別な才能がなくとも、人は容易に科学者になれる。そして、既存のフレームの中で、比較的矮小な問題を取り上げ、解答を見出しては楽しむこともできる。そのようにして、日常的な営みを安楽に送ることが保証されることによって大量の科学者が社会の中で生きていける。でき上がってしまった科学の中では、限られた人々だけが、解があるかどうか判らない問題に取り組んでいるにすぎない。

この文章を読み返すたびに世の中のほとんどの研究者は「サラリーマン研究者」であり、「真の研究者」（こういう言い方ができるかどうかはわからないが）はわずかしかないのではないかと思ってしまう。

大学運営、学内行政はどうか。講義の準備に毎回少くない時間を授業の前後に費やし、さらには論文以外のさまざまな文書、伺い、会議資料の作成、郵便物やメールの処理、そして研究のアイデアを考えるよりはるかに多くの時間を費やす申請書類作りに追われていたら到底普通の教員は大学運営にかけ余力などは残っていないであろう。

さらに社会貢献にいたっては、そもそも教育や研究が社会に対する貢献の意味合いを含んでいると個

人的には考えていたので、どうにもしっくりしない。

大学教員の仕事をやる上で真に大事にすべきものは、教育能力と研究能力である。これらはコストが明らかに目に見えない反面、最もエネルギーが注がれている部分であり、これらを蔑ろにすると大学のカラーが変質し、壊れていくことに繋がるのではないかと思う。

本学紀要も今号で刊行から数えて8冊目になるが、研究論文あるいは研究報告を掲載するという研究中心の編集スタンスで来ている。若手研究者の論文投稿の場（論文修練の場と言ってもいいかもしれない）としての役割は否定しないし、今後も維持していくことになるであろう。教育実践活動を取りまとめた教育実践研究も本学の教育活動の成果を対外的に公表していく手段のひとつとして重要なものだと認識している。

それに加えて、大学教員を「三重人格」「四重人格」に追い込む仕事となっている大学運営や社会貢献の面についても紀要の中で取り上げていくことができないか模索している。もちろん本学にも年報の意味合いを持つ刊行物『広報ぎふ看大』が毎年刊行されているが、それと内容的に重複することなく何か形として今後に残せないものかと思う昨今である。対外的に大学教員が「多重人格」的に仕事をこなしていることを知らしめたいというわけではないが・・・。

紀要委員長を務めてから3年目になるが、大学の紀要はどうあるべきかという問いに対してまだ明確な答えを見出せないままである。

「大学紀要なんて読むに値しない論文の巣窟」などと揶揄するのは容易いし、昔からそういう意味の発言はたくさんあった。ただ、そう言い切ってしまうと流されてしまうのもなんだか癪なのである。

文献

- 1) 潮木守一：アメリカの大学，291-292，講談社，1994.
- 2) 鈴木継美：人類生態学の方法，2-3，東京大学出版会，1980.